

子どもの自己肯定感を向上させるための

取り組みについての一考察

—小学校での取り組みに着目して—

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース

126056 山口 翼

子どもの自己肯定感を向上させる取り組みについての一考察

—小学校での取り組みに着目して—

氏名 山口 翼

生徒指導力高度化コース

要約：近年、人との適切な関わりがもてず、対人関係トラブルに発展したり、問題行動や不適応につながったりするという子どもの問題が数多くあげられている。このような学校不適応の要因や背景として、自己肯定感の低さがある。そこで私は、小学校現場において子どもの自己肯定感を向上させる取り組みについて明らかにしようと考えた。そのために小学校の教員へのインタビューを行った。そこから、子どもの自己肯定感を向上させるための学級経営について、担任教師が行うことができる取り組みを「授業面」や「生活指導」、「学級活動」などの視点から明らかにし、考察を行った。

キーワード：自己肯定感 学級経営 小学校 授業 生活指導 学級活動

第一章 序論

第一節 はじめに

私は教職専門実習Ⅱ（以下実習Ⅱ）前の課題として、子どもの自己概念の向上について取り組もうと考えていた。私が実習Ⅱで担当したクラスは、教職専門実習Ⅰ（以下実習Ⅰ）で担当したクラスと同じクラスであり継続して子どもたちの様子を観察することができた。

1学年進級した実習Ⅱでの子どもたちは、学級開きの自己紹介文作成において、自分の苦手なことや嫌いなことを書く子どもが何人かおり、クラスの中に自己肯定感の低い子どもたちがいることを感じた。

実習Ⅱにおいて私は、子どもたちの自己肯定感を向上させるための取り組みを行った。主に行ったことは「ほめる」という取り組みである。私は、少し頑張れば達成できる課題に子どもたちが臨み、達成したときに「ほめる」取り組みを行った。しかし、「ほめる」だけでは子どもの自己肯定感は向上しなかったように感じた。そこで私は、小学校現場において子どもの自己肯定感を向上させる取り組みについて明らかにしようと考えた。本研究をもとにして、今後現場に出た際に、よりよい実践が行えるようにしたい。

第二節 研究の意義

近年、人との適切な関わりがもてず、対人関係トラブルに発展したり、問題行動や不適応につながったりするという子どもの問題が数多くあげられている。このような学校不適応の要因や背景として、自己肯定感の低さが指摘されている。また、高垣（2004）は、子ども問題の解決のキーワードは自己肯定感であると述べ、諸富（1999）も心の問題の背景には自己肯定感が低い要因がある、と述べている。

また、財団法人日本青少年研究所『中学生・高校生の生活と意識調査報告書（2009）』によると、日本の中学生は他国と比較して、自分の能力に肯定的な態度を持つ割合が低い傾向が明らかになっている。つまりこのことは、現代の子ども自己肯定感が低下しているということを示している。また、文部科学省『子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題（2009）』では、「9歳以降の小学校高学年の時期には、幼児期を離れ、物事をある程度対象化して認識することができるようになる。対象との間に距離をおいた分析ができるようになり、知的な活動においてもより分化した追求が可能となる。自分のことも客観的にとらえられるようになるが、一方、発達の個人差も顕著になる（いわゆる「9歳の壁」）。身体も大きく成長し、自己肯定感を持ちはじめの時期であるが、反面、発達の個人差も大きく見られることから、自己に対する肯定的な意識を持てず、劣等感を持ちやすくなる時期でもある。」ということから、「学童期」における自己肯定感の獲得・育成が課題として挙げられている。つまり、自己肯定感向上の取り組みについて研究することは有意義なことである。

第二章 研究の背景と目的

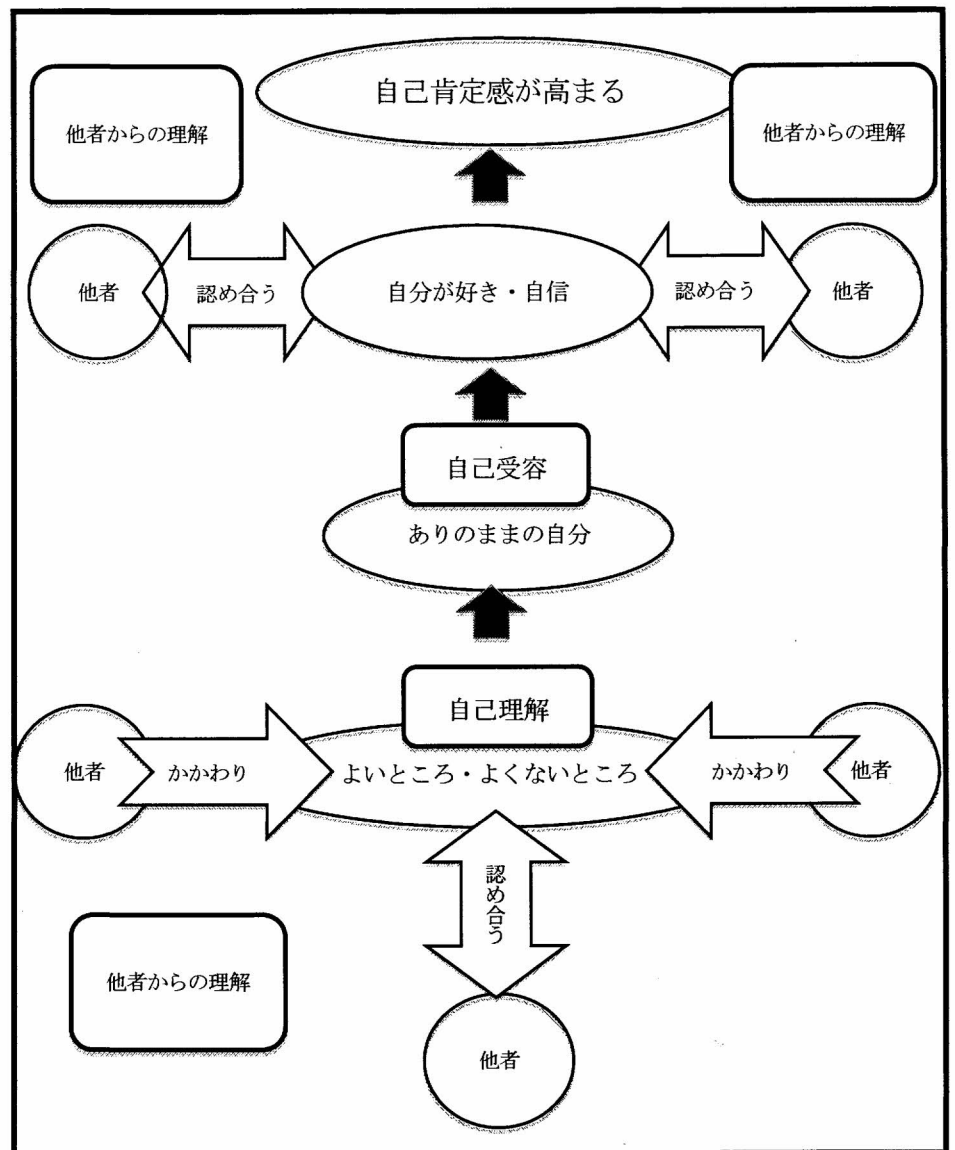
第一節 自己肯定感について

自己肯定感とは、「自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情」（田中、2008）と定義されている。

マズローの欲求段階において、自己実現の欲求が達成されるためには、その下位の欲求である自尊の欲求、所属の欲求が満たされることとしている。自尊の欲求は、周りから認めてもらいたいとする欲求である。また所属の欲求は、集団帰属の欲求で、あたたかく迎えてくれる集団や個人を求める欲求である。そして、上原（2012）は『自己肯定感』にかかわる『自尊欲求』が生まれるためには、下位欲求である『所属と愛情の欲求』が満たされる必要がある」と述べている。

図1に示すように、自己肯定感向上のプロセスは、自分のよいところやよくないところを知る（自己理解）ことから始まる。その後、ありのままの自分を受け入れ、自分のことが好きになること（自己受容）、そして、他者から認められたり、受け入れられたりすること（他者からの理解）により、自己肯定感が高まると考える。

自己肯定感を高めるための弊害として、子どもたちの自己中心的な言動があげられる。子どもたちは成長する過程で、自分を中心にして物事を考え、他者を考慮することができない。特に小学校段階では顕著である。しかし、学校での集団生活を通した他者とのかかわりの中で、自分の欲求や興味が他者とは違うことを知り、自分を抑制することができるようになる。自分を抑制することは、人間として自立していくために必要な発達であり、他者とのかかわりの中で求められるものである。



したがって、自分の中にあるよくないところについて知り、受け入れるなかで、抑制したり変容したりしていかななくてはならないと考える。

自己肯定感をもち、高めていくために、他者とのかかわり、特に、友達や担任など身近で受け入れられていると感じるものから認められることが必要である。自分の存在が認められ、受け入れられている実感をもてるとき、ありのままの自分を肯定的にとらえることができる。

図1 自己肯定感が高まる過程

第二節 学校現場における自己肯定感

小学校における自己肯定感に関する過去の研究としては、岩崎（2004）が低学年の子どもを対象とした自己肯定感を高める学級経営について、構成的グループエンカウターの視点から明らかにしている。他者理解・自己理解を促進するために、友達と仲良くなるリレーション作りから始め、次に、自分や友達について認識し、友達と関わらせながら、友達の良さを認めることができるようにする。

その結果、子どもたちは、自分のことだけではなく、友達のことも考えることができるようになり、授業中に教師の話を聞いていない友達には、しっかり聞くように、やさしく教えるようになったことが明らかになっている。つまり、自己理解や他者理解が深まることで、自分の良さや友達の良さに気づくことができ、自己肯定感の向上につながるということが明らかにされた。

また本田ら（2012）の研究では、子どもの自己肯定感と教師への信頼感の相関について明らかにされている。この研究では、自己肯定感の高い子どもの方が、教師への信頼感が高いということが明らかになっている。そして、教師と子どもの信頼関係を築くことが子どもの自己肯定感を向上させることにつながるということも述べられている。

次に、学習面における自己肯定感である。学習面においては栗木（2013）が、自己肯定感を高める生活科学習の理論と実践について明らかにしている。ここで栗木は、「試行錯誤を支える環境」を取り入れることが子どもの自己肯定感を高めることにつながると述べている。「試行錯誤を与える環境」とは、子どもが試行錯誤できるような学習環境を充実させることである。子どもたちが繰り返し努力しなければ解決できないような課題に臨み、その課題を自分の手で乗り越えることで自己肯定感を育むことができるということが明らかにされている。

第三節 研究の目的と課題

本研究の目的は、小学校における自己肯定感を向上させる学級経営について明らかにすることである。学級経営を行う上で、子どもの自己肯定感を向上させるためにどのような取り組みを行えばよいか明らかにする。

また本研究では以上のことを明らかにするために、次のような課題を設定する。

課題：子どもの自己肯定感を向上させる学級経営での取り組みを明らかにする。

第三章 研究方法

実際に、小学校教員として長年勤務されている先生方にインタビューをさせていただき、学級経営を行う際にどのような取り組みを行えば子どもの自己肯定感を向上させることができるかインタビュー調査を行う。小学校教員の3名の先生方にそれぞれ1時間程度のお時間をいただきインタビューをさせていただく。

インタビューでは、授業面や生活面、学級活動面などの観点から、自己肯定感を向上させるための取り組みについてについて調査する。そして、自己肯定感を低下させる教師の関わりにも着目し、より教師のテクニックに迫ったインタビューにしたい。

第四章 結果とまとめ

第一節 結果

本研究では、小学校教員として長年勤務されている先生方にインタビューを行った。本節ではその結果をそれぞれの先生方毎にまとめる。その際、課題別にまとめ、そして、次節でインタビュー全体を通しての結果をまとめる。

【A教諭】A教諭は、経験年数32年の女性教諭である。担任歴が30年と長い経験がある。低・中・高学年とすべての学年の経験が豊富な教員である。

今回のインタビュー内容についてまとめる。自己肯定感を向上させるために、何よりも大切なことは、子どもとの信頼関係を築くということである。信頼関係ができていると、子どもへの指導が通りやすくなり、保護者との連携も上手くとりことができ、子どもの自己肯定感向上につながる。

子どもと信頼関係を築くために教師が行える取り組みとしては、日記がある。毎日、子どもたちに日記を書かせることで、日々の子どもの様子を知ることができる。さらに、教師と子どもが一对一で向き合えることができる日記は、子どもとの関係作りに大いに役立つのである。子どもとの信頼関係が築かれることによって、後に示す取り組みが自己肯定感向上に有効となる。

次に授業面である。授業の中で子どもの自己肯定感を向上させるために重要なことは、子どもに達成感を与えるということである。そのために、個別に課題を設定するという取り組みが挙げられる。それぞれの子どもに、少し頑張れば達成できる課題や目標を設定し、達成する経験が自己肯定感向上につながる。ここで重要なことは、他人と比べて、できる、できないではなく、自分の中で課題や目標を設定し、達成することである。

この際、教師の関わりとして留意すべきことは、子どもに設定した課題や目標が妥当なものか教師がしっかりと確認するということである。子どもにとって課題や目標が高すぎると、自己肯定感を低下させてしまう恐れがあるため、教師による確認が重要である。

しかし、その子どもにとって課題や目標を立てることが一番難しい。その際に重要となることは、絶対他人と比較しないということである。その上で、教師が個別にしっかりと評価し、肯定することが重要であり、その関わりこそが子どもの自己肯定感向上につながる。

次に生活指導において自己肯定感を向上させるための取り組みである。ここでは、休み時間での取り組みが挙げられる。休み時間で行える取り組みは、当番活動である。子どもたちに日直や給食当番、係活動などの当番活動の役割を与える。子どもたちは当番活動の中で、意欲的に計画し、実行することで達成感を得ることができる。

その際に教師が留意すべき点は、子どもに任せきりにしないということである。子どもたちが行った当番活動を評価し、学級のためになったということを実感させ、自己肯定感向上につなげる必要がある。

次に学級活動において、自己肯定感を向上させるための取り組みである。ここでは学級通信を自己肯定感向上に活用することができる。子どもたちの誕生日になると、学級通信に保護者からのメッセージと、担任からのメッセージを載せ、子どもたちに配布する。保護者からのメッセージには、子どもの生まれた様子や名前の由来を書いて貰い、掲載する。

子どもたちは、誕生日＝何か買ってもらえる日と思っていることが多く、この取り組みを行うことで、生まれてきたことに感謝することができる。子どもたちの中には、名前の由来も、母親が苦しんで産んだことも知らない子どもも多い。そこで、保護者の想いや教師の想いをみんなの前で読んでもらうことが、自分の命に感謝することにつながり、何よりも自己肯定感向上につながるのである。

次に、子どもの自己肯定感を低下させてしまう教師の関わりである。一番は、理由を聞かずに叱るということである。状況を見るだけでは、適切な指導を行うことはできない。適切な指導を行うことができないと、子どもに納得を与えることができない。子どもが納得しない指導を行ってしまうと、子どもの自己肯定感低下につながるのである。

【B教諭】B教諭は経験年数31年の男性教諭であり、そのうちの29年が担任をもっている経験年数豊富な教員である。主に中学年と高学年の経験が豊富であり、父性的な関わりを得意としている教員である。

今回のインタビュー内容についてまとめる。まず授業面である。授業の中で自己肯定感を向上させるために重要なことは、前の自分と比べてかわったところを実感させるということである。「できる」、「わかる」、「上手くなる」の3つが自覚できたときに自己肯定感が高まる。具体的には一問一答の発問を多く取り入れるということである。子どもが根拠をもって発言したときに、考えを認めることで、子どもは認められたと感じることができ、自己肯定感向上につながる。

次に生活指導である。普段の生活の中で、子どもが行った行動が他人の役に立ったときに、認めることが重要である。自分の為ではなく、他人の為に行動したときに認めることで、子どもの自己受容につながり、自己肯定感が向上するのである。

また掃除の中で自己肯定感を育むことができる。掃除の中で、子どもたちが「ここは綺麗にしておいた方が良い。」ということに気づき、行動することができたら、認める。決まった場所しか掃除しない子どもが多い中、自分で気づき、様々な場所を掃除することができた子どもは積極的に認める必要がある。そのために、教師の声かけが重要となってくる。学級開き当初から、教師が熱心に声かけを行うことによって、子どもたちは視野を広くもって掃除を行うことができる。

次に学級活動である。学級活動では、まず朝の会のスピーチである。スピーチでは、話題提供型で進行することが有効である。発表者が選んだ話題に対して、クラス全員が興味を持ち、質問や感想を述べることによって、発表者が認められたと感じ、自己肯定感向上につながるのである。

終わりの会では、具体的な反省の中でいいところを探すということである。たとえ揉め事があったとしても、その揉め事を解決するために「こんないいことがあった。」とか「こんな風に誰かのためにみんなが働いた。」ということを、発表し合い、「また明日はもっといいクラスにしよう。」と言う形で終わることができたら、子どもたちの自己肯定感を高めることができるのである。

次に、子どもの自己肯定感を低下させてしまう教師の関わりである。最も重要なことは、子どもの人格を否定しないということである。行為は叱っても、人格は否定しないということが重要である。

【C教諭】C教諭は小学校での経験年数が25年の男性教諭であり、そのうち中学年で2回、残り
は全て高学年で学級担任をもっている経験豊富な教員である。

今回のインタビュー内容についてまとめる。まず子どもが自己肯定感を高めるためには、教師が自分の教育観をしっかりともっていなくてはならない。自分の教育活動に自信をもった教師でなければ、子どもに伝わらず、子どもの自己肯定感を高めることにはつながらない。教育活動に自信をもった教師に指導されることで、子どもは信頼感を得ることができ、子どもの信頼感が親の信頼感につながる。担任教師は、親以外の大人の中で一番長い時間を子どもと過ごす存在である。そのため、教師は自分の関わりが子どもの成長を大きく左右させるという自覚を持って、教育活動に取り組まなくてはならない。

次に授業面である。授業では、何よりも公平を期することが重要である。公平を期することで、クラスの雰囲気を作ることができ、クラスの仲間を認めることにつながり、自己肯定感向上に結びつく。

公平を期するということは、数人で進むような授業を行わないということである。つまり、全員が参加する授業を行うということである。

そして、公平を期するためには、1時間の授業中に全員を当てるということを意識しなくてはならない。子どもの手が挙ると必然的に子どもが授業に参加することにつながる。

子どもの手が挙らないときには、話し合い活動を取り入れたり、同じ発問を繰り返したり、発問の仕方を変えたりする。すると、子どもの手が挙る人数が増える。手を挙ることができた子どもは、自信をもつことができ、次の発問でも手を挙ることができるようになる。

また、体育では技能の向上ではなく、雰囲気作りを重視した授業展開を行うことが重要である。今までできなかったことができるようになれば、子どもの自信につながり、自己肯定感向上につながることは間違いないが、技能をすぐに向上させることは難しい。

そのため、体育や音楽、図画工作などの実技を伴う教科では、友達同士の励まし合いや、教え合いといった活動が自己肯定感を向上させるための近道である。自分を周りの友達が認めてくれるという経験が、他人を認めることにつながり、さらには他人のために頑張ろうという考え方につながる。その考え方を身につけることが自己肯定感を向上させる。

次に生活指導である。生活指導では、マナーとルールを守ることを徹底させるということである。それらを守ることが社会性につながり、また守ることが自己肯定感につながる。授業時間や給食中などに立ち歩く子どもがいたら、厳しく叱ることが重要である。その上で、さらに自分たちでルールを新たに考えたり、お互いを注意し合ったりすることが自己肯定感向上につながる。

次に子どもの自己肯定感を低下させてしまう教師の関わりである。一番注意しなくてはいけないことは、子どもを信じずに教師が進めてしまうということである。子どもを中心に授業や学級活動を進めることができると、子どもの自己肯定感は向上する。しかし教師が中心になり進めてしまうと、子どもは「先生の言った通りにやれば良い。」と思ってしまい、子どもの自己肯定感は高まらない。子どもから答えが出なくても、発問や指示の言葉を変化させながら子どもからの答えを待つ姿勢が大切である。

第二節 まとめ

この節では、上述した結果を表としてまとめる。

表1 インタビュー結果まとめ

課題：子どもの自己肯定感を向上させる学級経営での取り組み	授 業	生 活 指 導	学 級 活 動	低下させる関わり
	・達成感を与える。 ・子どもに対し、個別に課題を設定する。 ・子どもの考え方を認める。 ・一問一答の発問を多く取り入れる。 ・公平を期する。 ・実技を伴う教科では、技能の向上に目標を置くのではなく、自他を認め合うことに目標を置く。	・給食では、苦手なものに少しずつ挑戦させる。(少しずつ食べてみる、他のおかずと混ぜて食べる) ・当番活動を取り入れることによって、子どもに達成感を与える。 ・掃除などで子どもが他人のために行動したときに、取り上げ、ほめる。 ・マナーとルールを守ることを徹底する。 ・子どもたち同士で新たなルールを考える。	・朝の会でのスピーチ。 ・終わりの会で、友達やクラスの良いところを発表し合う。 ・学級通信の活用。 そ の 他 ・児童理解をしっかりと行う。(毎日全員と会話する。) ・子どもと信頼関係を築く。(保護者との信頼関係につながる。) ・日記を毎日書く。 ・教師が教育観をしっかりともつ。	・理由を聞かずに叱る。 ・子どもの人格を否定する。 ・決めつけた指導。 ・子どもを信じずに、教師だけで学級経営を行う。

以上のように、結果をまとめた。ここでは、自己肯定感を向上させる学級経営を、「授業、生活指導、学級活動、その他」という4つの視点から明らかにすることができた。また、子どもの自己肯定感を低下させる教師の関わりについても明らかにすることができた。

第五章 考察

先生方へのインタビューの結果から、子どもの自己肯定感を向上させるための学級経営について考察する。まず、前述した教師の取り組みを以下の3点にまとめ直し、考察する。

表2 考察まとめ

	信頼関係	達成感	お互いを尊重しあう学級作り
取り組み	・教師が自分の教育観をしっかりともつ。 ・日記を毎日書かせる。 ・子どもとの信頼関係が保護者との信頼関係につながる。	・個別の課題を設定する。 ・一問一答の発問を取り入れる。 ・給食で苦手なものを食べる。 ・当番活動の活用。	・技能ではなく、自他を認める授業作り。 ・子ども同士で新たなルールを考える。 ・朝の会でのスピーチ。 ・良いところを見つけ合う。 ・学級通信の活用。

1点目は子どもとの信頼関係をしっかりと築くということであった。本田ら(2012)による「自己肯定感の高い子どもの方が自己肯定感の低い子どもに比べ、教師に対する信頼感が高かった。」という結果からも明らかなように、教師と子どもの信頼関係は自己肯定感向上に大きく関わる要素であることが本研究でも明らかになった。信頼関係ができていると、子どもへの指導が通りやすくなり、保護者との連携も上手くとることができ、子どもの自己肯定感向上につながる。

子どもとの信頼関係を築くためには、日記が有効である。日記指導においては高山ら(2011)が「日記指導においては、児童の日記に対して、質問や肯定的なコメントを書くことにより、児童とのコミュニケーションが取りやすくなった。また、児童の家での生活や児童の人間関係を知ることができた。」と述べているように、日記を子どもたちに毎日書かせることは、児童理解につながり、子どもと信頼関係を築くために大変有効であると考ええる。

また子どもと信頼関係を築くことで、保護者とも信頼関係を築くことができることが今回の調査で明らかになった。木村ら(2005)は「保護者と教員の間に信頼関係が築かれ、それにより保護者の我が子への関わり方が変わるということだけでも、児童生徒の自己肯定感が高まる大きな要因となっている」と述べていることから、保護者と信頼関係を築くことで子どもの自己肯定感を向上させることができるのである。

2点目は、達成感である。子どもがある課題を達成したときに自己肯定感が高まることが明らかになった。達成感を与えるためには、成功体験が挙げられる。ここで重要なことは、安易な成功体験ではなく、ある程度の困難を乗り越えた成功体験が必要だということである。榎本(2010)が「打たれ強さを持ち、逆境にもめげず強く前向きにものごとに取り組むことができたとき、自分の強さを実感するとともに、真の意味での自己肯定感を獲得していく。」と述べていることから、安易な成功体験ではなく、ある程度の困難を自分の力で乗り越える体験が求められているのである。

具体的には前述した表で述べた通りであるが、教師が子どもに対して、適切な課題を設定し、子どもが乗り越えることで、自己肯定感が高まるということが明らかになった。

3点目は、お互いを尊重し合う学級作りということである。上述したような取り組みから、お互いを尊重し合う学級作りを行うことで、子どもたちに所属感が生まれ、自己肯定感の向上につながるのである。栗谷ら(2009)の研究において、「自己肯定感に所属感は大きな影響は与えていた。・・・中略・・・思春期の子どもたちの生活の中で、友人がいて、その友人と何でも気楽に話すことができることは安心して学校生活を送る上で重要な要因となる。」と述べられている。つまり、お互いを尊重し合う学級作りは子どもたちの自己肯定感を向上させることができるのである。

次に、第二章で述べた自己肯定感向上のプロセスと今回の結果から考察を行う。まず、今回の結果から教師の児童理解が何よりも重要であることが明らかになった。児童理解をしっかりと行わなければその後の取り組みの効果も低くなるのである。

また教師が児童理解を行い、子どもと関わることで、子どもたちの自己理解を促すことができる。子どもたちが自己理解を行うことは、自己肯定感向上において最重要事項であることから、第二章の自己肯定感向上のプロセスと今回の結果は合致する。

その後、結果で述べた様々な取り組みを行うことで、子どもの自己受容を促進させることができる。そして、自己受容の促進が自己肯定感向上につながるのである。ここでは他者からの理解も重要であり、お互いを尊重し合うことがより自己肯定感向上につながる事が明らかになった。このことは第二章の自己肯定感向上のプロセスと合致する。

第六章 おわりに

子どもの自己肯定感を向上させるための学級経営について、担任としてどのような取り組みができるのか、文献研究やインタビュー調査をする中で考察を導くことができた。今後の課題

としては、筆者がこれからの教育活動で今回明らかになった取り組みを実践し、子どもたちの自己肯定感を育てていくことである。

最後に、本論文をまとめるにあたり、大変お忙しい中インタビュー調査を快く受け入れてくださった、インタビューの先生方に心より御礼申し上げます。また本論文作成にあたり、熱心にご指導ご鞭撻していただいた角田豊教授に感謝申し上げます。

参考・引用文献

- ・榎本博明 (2010) : 「子どもの『自己肯定感』の持つ意味」、児童心理、NO. 910、金子書房
- ・本田優子ほか (2012) : 「中学生の自己肯定感と教師への信頼感および関わり経験との関連」熊本大学教育学部紀要、自然科学、第 61 号、75-84
- ・岩崎靖子 (2004) : 「自己肯定感を高める学級経営の実践的研究 (低学年) - 構成的グループ・エンカウターの手法を取り入れて -」佐賀県教育センター
- ・木村正登ら (2005) : 「児童生徒の自己肯定感を高める保護者との連携の在り方に関する研究」、やまぐち総合教育支援センター、教育研修部
- ・栗木隆雅 (2013) : 「自己肯定感を高める生活科学習の理論と実践に関する研究-子どもが試行錯誤する学習場面の分析を通して-」愛知教育大学大学院、生活科・総合的学習研究、11、97-104
- ・諸富祥彦 (1999) : 「“自分”を粗末に扱う子どもたち カウンセラーからみた子どもたちの変化」日本教育学会大会研究発表紀要項、58、108-109
- ・高垣忠一郎 (2004) : 「生きることと自己肯定感」新日本出版社
- ・田中道弘 (2008) : 「自尊感情における社会性、自尊感情形成に際しての基準：自己肯定感尺度の新たな可能性」下斗米淳 (編) シリーズ自己心理学第 6 巻社会心理学へのアプローチ、金子書房、pp27-45
- ・高山輝也・笹山龍太郎 (2011) : 「児童の自己肯定感を高めるための指導の実践～クラス全体への指導を中心として～」、教育実践総合センター紀要、10、pp. 133-142
- ・上田知佳子ほか (2012) : 「自己肯定感と『褒められる』『叱られる』の関係性について」、京都教育大学教育学部紀要
- ・上原学 (2012) : 「自己肯定感を高め、思いやりの心を育てる指導の工夫～自他のよさに気づき、認め合う対話を通して～」、那覇市立教育研究所研究報告書